

Senior

Essay

ショウ チブン

Zhong Zhiwen

苦しみを抱え、人生を抱きしめる

アメリカの医学博士のエドワード・リヴィングストン・トルドーの墓碑銘には、「時に癒し、しばしば和らげ、常に慰む」と書いてある。しかし現実には、医者は病気を最大の敵とみなし、医者たちの主な目標は治療である。ところが、哲学者は、重要なのは癒すことではなく、病とともに生きることだと言った。実は、体の病だけでなく、人生で遭遇した苦しみにも当てはまる。苦しみを乗り越えるより、感謝の気持ちを持ち、苦しみと向き合いながら素晴らしい人生を送るべきだ。

病といえば、人々はまずそれを治す方法を探そうとする。毎年、病気に罹り、そこから回復できずに転落していく人が数え切れないほどいる。医療技術が発達した現代でも、治らない病気、薬で病気の進行を遅らせるしかない病気はたくさんある。たとえ完治したとしても、皮膚にはその苦しみを思い出させる傷跡が残るかもしれない。精神的な病気や、人生で遭遇した苦しみは言うまでもない。このような時、最後まで生きていくことに重要なのは、医師の優れた知識よりも、患者自身の強い意志である。したがって、人はさまざまな苦しみとずっと向き合っていると見え、そこから離れる可能性は非常に低いのだ。苦しみを完全に克服する方法を考えるのではなく、苦しみを人生の道連れとみなし、それに「ありがとう」と言ってみる。苦しみと闘う過程で意志を磨き、自分の人生をつかむ方法を身につけられると考えられる。

苦しみとの戦いに勝つか負けるかに執着する必要はなく、むしろ最初の姿と比べて、新しい人生を迎えたかどうかにか焦点を当てるのだ。低迷していた状態から再び立ち上がるまでの過程で、生きる勇気、困難に立ち向かう自信と意志があるかを考えるべきだ。何の効果もない薬で治療を受けても、「これは新しく開発された効果的な薬だ」と言われさえすれば、一定の割合の患者が治るといって、心理学的に重要なプラセボ効果が研究で示されている。これは、治るかどうかは気にする必要はなく、生きていく勇気さえあれば、それこそが最大の利益であることを証明している。

苦しみが私たちに痛みをもたらすだけでなく、精神的な成長を促し、人生の美しさを認識させてくれることがわかる。苦しみに感謝すべきなのだ。完璧な人生とは、苦しみを乗り越える

ことではない。苦しみとともに生きることを学び、より良い未来への希望を抱き続けることが、最良の結末なのではないだろうか。